

井伏鱒二における地域文化への着目

—「在所もの」への道程—

秋枝美保

1、プロレタリア運動における「大衆像」への批判と

「在所」への着目

筆者は、井伏鱒二の「在所もの」と言われる作品から戦時下作品「鐘供養の日」について論ずる過程で、その作品の原点として昭和八年（一九三三年）にかけて発表された「鐘」をモチーフとした一連の作品—江戸時代の農民一揆を取り上げ、そこに農民たちの意志の結集の象徴としての「鐘」を描く—があることを示し、それが井伏の「在所」の庶民への着目への中核の一つになっていることを示した。⁽¹⁾ その際、「在所」の人々の生活への本格的な着眼は、ちょうど昭和三年から四年にかけて行われたプロレタリア運動におけるいわゆる「芸術大衆化論争」が行われていた時期と重なっており、プロレタリア文学が「文壇的文学」を否定したことを認めながら、一方「そこには文壇的文学に代る大衆的文学も発生しなかつた」（「散文芸術と誤れる近代性」という点に井伏の批判はあり、その批判がプロレタリア文学における「大衆」像の観念性に対するものであったことを示した。⁽²⁾ それは、これまでの研究成果ともある程度の符合を示す。松本鶴雄は、昭和二年から五年にかけての井伏の作品に、プロレタリア文学の「大衆の立場に立て」と

いう「声」への井伏としての対応をみていた。⁽³⁾ また、前田貞昭は、昭和三年の初めから四年前半にかけての井伏の文学評論を取り上げ、そこに、プロレタリア文学の「一般民衆」に対する「倫理」については認めながらも、その「実作」については否定するようになる井伏の姿勢の変化を指摘していた。⁽⁴⁾

関連作品の年表によって、その全体的な動向を眺めておこう。☆は現代文学の動向への評論、□は「在所もの」といわれる小説、網掛けは郷里の人々の知恵、文化についての随想、アンダーラインは郷里の農村の荒廃した現状についての随想、○はその他の小説である。

☆「或る統計」（昭和三年二月十三日、三十日『福岡日日新聞』）

★中野重治「いわゆる芸術大衆化論の誤りについて」（昭和三年六月『戦旗』）

★蔵原惟人「芸術運動における左翼清算主義Ⅱプロレタリア芸術運動に対する中野・加地両君の所論について」（昭和三年十月『戦旗』）

☆「鱒二への手紙」（昭和三年十月『文芸都市』第一巻第一号）

「朽助のある谷間」（昭和四年三月一日『創作月刊』第二巻第三号）

☆「散文芸術と誤れる近代性」（昭和四年四月二日、三日、四日『福岡

「日日新聞」)

○「山椒魚」(昭和四年五月『文芸都市』第二卷第五号)

☆「理論」(昭和四年六月『文芸都市』第二卷第六号)

☆「巻頭言(なつかしき現実)」(昭和四年八月『文芸都市』第二卷第八号)

☆「アンコンシヤスネスの魅力」(昭和四年九月『詩神』第五卷第九号)

(★林房雄「プロレタリア大衆文学の問題」昭和四年十月『戦旗』)

☆「一九二九年の小説」(昭和四年十二月)『詩神』第五卷第十二号)

○「さざなみ軍記」(逃亡記)(昭和五年三月『文学』第六号)昭和六年十月『作品』第十八号、昭和八年四月『蠟人形』四卷四号)

(★「芸術大衆化に関する決議」(昭和五年六月『戦旗』)

「早魃地帯」(昭和五年七月二十七日読売新聞)

「丹下氏邸」(昭和六年二月『改造』第十三卷第十号)

「田園記」(昭和六年三月一日『作品』十一号)

「秋祭を待つ子供たち 福山」(昭和六年十月二日『婦人サロン』三卷十号)

「荒廢の風景」(昭和七年二月二十七日)三月一日『都新聞』)

「客人」(昭和七年八月『新潮』二十九卷八号)

文学講座「文学と地方色」(昭和八年二月十日発行『河北新報』)

(★小林多喜二の死(昭和八年二月二十日))

「釣鐘の音」(昭和八年五月五日『あらくれ』四号)

「架空動物譜」(昭和八年七月一日『文藝春秋』第十一年第七号)

「釣鐘の音に関する研究」(昭和八年七月五日)九年三月『あらくれ』

六号、二卷三・四号)

「田園記」(昭和八年十月『文学界』)

(★日本プロレタリア作家同盟解散 昭和九年二月)

「凶作余聞」(昭和九年十一月二日、三日、四日『報知新聞』)

「困憊の状況」(昭和十年二月一日『中外商業新報』)

この年表を見ると、現代文学の動向への視点と「在所」への関心を持つに至る過程、「在所もの」執筆への道程を、一つながりのものとしてみることが出来る。

井伏は、随筆「理論」や随筆「アンコンシヤスネスの魅力」において、「純粹理論」を否定し、「読む人の心を感動させる」には「感覺の流動性」が必要であるとし、その姿勢を「人世にまみれる」と表現した(「後者」)。また、「散文芸術と誤れる近代性」の結論において、「社会的傾向の要素」を持つ文学の必要性を述べ、その要素を「近代性への誤らざる批判」であると示した。そこに井伏の目指す「文壇的文学に代る大衆的文学」の方向性を見ることが出来るように思う。

そこに描かれてきた大衆像とはどのようなものであったのだろうか。筆者は、井伏が描いた大衆像の解釈について、前述の「鐘」にまつわる一連の作品を核とする「幕末もの」などを通して、これまでの解釈における、諦観と現実受容的な静的な姿を強調するいささか平板な井伏大衆像には疑問を呈した。

たとえば、これと機を接して発表され、「在所もの」の嚆矢とされるのが「朽助のゐる谷間」(昭和四年)であるが、これと「丹下氏邸」(昭和六年)の間には、描かれた大衆像に段差があると感じられる。川崎和啓『朽助のゐる谷間』⁵⁾は、「朽助」は常民のように見えながら、実は「作

者井伏鱒二の屈託した近代的個我的投影された人物」だという指摘をしている。朽助が押し寄せる時代の変化にただただあわてるのみであるとすれば、エイの「私はどのやうにも、なるやうにしかならんでありませう。所詮は、屁はカゼですがな！」という言葉は、現実に対するきわめて強固な覚悟を示しているといつてよからう。その間に井伏の見た大衆像を、今一度検証しなおす必要があるように思われる。

2、「在所」の世界観―「田園記」・「秋祭を待つ子供たち―福山―」

・「架空動物譜」

「丹下氏邸」とほぼ同時期に発表されたエッセイに、「田園記」・「秋祭を待つ子供たち―福山―」がある。「田園記」は、「ウシトラ様」「竜王様」という二つのパートからなり、二つの祠とそこで行われる祭祀について描かれている。また、「秋祭を待つ子供たち―福山―」においては、「秋祭」の風景とそこで鳴らされる「鐘」に刻まれた江戸時代の一揆の様子について描かれている。いずれも村人の信仰とその生活空間が想像されるスケッチ風の作品である。そこからは、「さざなみ軍記」(「逃亡記」)において、主人公知盛が瀬戸内海沿岸地方の庶民と出会いながらたくましく成長していくように、井伏自身が「在所」の人々の世界を再認識しながら自らの作品空間を構築していく様子を如実に知ることができる。そして、それは「丹下氏邸」を描く際の基盤となっているといえるのではなからうか。また、「架空動物譜」は、プロレタリア文学運動瓦解と接して書かれており、「鐘」にまつわる一連の作品に描かれた強い大衆像を支える民間信仰の世界をそれとなく描いて

いると考えられる。

しかし、これらの小品については、作品自体から受ける印象が弱く、これまではさして重要視されてこなかったといえる。筆者はこれらの作品について実地調査、文献調査を行っている。本論においては、その中から「田園記」に関する実地調査を踏まえて井伏が昭和六年前後に捉えた「大衆像」―井伏生家の村の世界観や生活心情―を明らかにしたい。

3、「田園記」―実地調査を踏まえて―その1「ウシトラ様」

実地調査・聞き取り調査の案内役兼被調査者は山根正昭氏で、二回目の調査には同町内の渡辺則男氏が同行した。山根正昭氏(八十一歳)は昭和六年生まれで、現在栗根地区町内会長、神社大総代、元大谷池委員である。渡辺則男氏(七十一歳)は、元町内副会長、現在大谷池委員である。山根氏は井伏が戦時中疎開していた昭和十九年から二十一年の間、中学生で、一歳上の井伏の長男と一緒に現在の府中高校に通っていた。そのころ、井伏は、生家の書斎の窓から顔を出して、山根氏に遊びに来いと誘い、釣りをしたり、将棋を打ったり、辻堂で遊んだりしたとのことである。そのころ井伏家の離れの電気が一週間か十日遅くまでついていることがあり、原稿執筆中かと思われたが、それからしばらくは電気がつかない日が続き、原稿料が入ってどこかにかけておられるのかと想像したりしたという。なお、山根氏の舎弟寛次氏(昭和八年生まれ)は木工芸作家で人間国宝であるが、それは井伏の勧めで公募展に出展したことから始まり、寛斎の雅号は井伏の命名

になるものという。

「ウシトラ様」「竜王様」について、井伏生家付近で実地踏査及び聞きとり調査を実施した(二〇一二年二月二十四日・六月一日)。また、「ウシトラ様」で行われたという神楽と同系列の神楽についても実地に鑑賞した(二〇一二年十月二十日、尾道市浦崎町)。

二つの祠は、井伏生家のすぐ裏山の二つの山の山腹及び山頂にあることが分かった。そして、今も加茂町栗根では、七年ごとの式年に村の顔役が代表で神事を執り行っているとのことである。二神は、村民の生活を司る二大神を指していると考えられる。

(1) 「ウシトラ様」①実地踏査

原文では次のように始まる。

ウシトラ様の祠は西北方の山腹にある。この神様は道路のことを司る神様であると言ひ伝へられてゐる。崖の下に池があつて、崖の上のウシトラ様の祠は、そのかけを池の水にうつし、二坪ばかりのバラックの神殿は、逆さまになつて水の中に見える。

二〇一二年六月一日、山根氏、渡辺氏、ゼミ生三人、中国新聞エリア通信員栗村真理子氏同行七名でウシトラ様を訪れた。山根氏宅の西側の崖の上に祠がある。今は戦後にかげられたコンクリートブロックの囲いと屋根瓦の覆いが外側を覆っている。これは、渡辺氏がかけたものとのことである。池は今はなく、畑になっている。(写真参照)

(2) 「ウシトラ様」②神の性格

「ウシトラ様」は、「道路のことを司る神様」とあるが、渡辺氏の話では、「さいの神」ともいひ、「幸の神」「境の神」とも書くとのことである。「さいの神」は、『日本民俗大事典』では「さいのかみ 塞の神」

で立項されており、「サイノカミともいい、道祖神ともいう」とあり、「峠や村境」を守る神とされているが、「中国の行路の神の信仰と習合し、道の神としても信仰されていた」という。⁽⁶⁾ また、土井卓治の「道祖神と性神」では、「サヘノカミ、サイノカミ」とし、「本来は境を守り悪霊邪神の入ることを防ぎさえぎる神であった」が、それが「行路を守る」神となり、また「幸神」の文字をあてるようになってからは、「幸福という広汎なレパートリーをもつ神」とされたという。⁽⁷⁾ 今回の調査では、祠の内部に出雲大社・大国主命のお札とその神像、良神社(福山市内にあり)のお札が奉納されているのを見た。

しかし、「ウシトラ様」という名称から調べると、「良の金神」という陰陽道の神に行き当たると。「金神」については、『日本民俗語大事典』では、「方角によって吉凶を左右する神」とされ、「陰陽五行説」に起源する遊行神⁽⁸⁾で、「春は丑・夏は申・秋は未、冬は酉」というように、「一季に六日間づつ方角を移りあるいて」おり、金神のいる方角に「土木事業・建築・旅行・結婚」などをすると、家族が七人殺されるといふ崇りのある神であるという。⁽⁸⁾ 江戸時代末期の岡山県地方では、「金神」の信仰を背景に「金光教」が開かれた。

(3) 「ウシトラ様」③祭祀の方法

「ウシトラ様」の祭りについては、原文に詳細な説明がある。

ウシトラ様の祭日は一年に一回、青葉の祭りを兼ねて行はれる。祠の横の広場で青松葉を燃して、今日が祭日であることを忘れてゐた人びとにも、早くお参りに来いといふ合図をする。(中略)

お参りに来る人びとは、一人一個づつ握り飯をもらひ、それを半紙につんで帰る。丸くて大きく、且つ塩のきつすぎた握り飯

なのである。子供たちは家に帰るまで待ちきれなくて、坂路を降りながら半紙を剥がし、その紙片にくっついた飯つぶを食べてゐる。

これについて聞いたところ、両氏の子供の頃、全くこの通りであったという。ウシトラ様の祭りを担当するのは粟根西町内会(土井・西光寺)で、祭日は春と秋の二回あり、特に秋は農繁期を終えた十二月に、各家で収穫した米で握り飯を作って配るとともに、野菜を煮しめなどに調理して持ち寄り、神楽の合間に食べたり飲んだりして楽しんでという。農作業が祭りとともに始まり、収穫の喜びを共有する祭りで終わる農村の一年間の生活のリズムが実感される。ただ、今は米を作らないため、握り飯でなく菓子配っているという。

(4) 「ウシトラ様」④神楽

原文の大半は、「ウシトラ様」の祭日に行われる神楽についての記述である。この神楽の台本、せりふの不思議さ、その熱狂的な雰囲気は、当時の様子を想像させ、興味深いのが、反面どういう内容のものか極めてわかりにくい。

演者については、「石工をしてゐる男と荷車曳きの男とが主役になって、彼等は頭にシヤグマを冠り、舞台に立つ。」とある。「石工」とは、両氏の話では、石を割って、墓石や田の畔などの石垣を作ったり、その他細工物を作ったりする職人で、西栗根には石工たちが多く住んでいたそうである。ちなみに「高橋のチカヤン」なる親分がいたという。また、「荷車曳き」は運送業で、馬に大きな車をつけ、朝四時くらいから「たきもの」など荷物を積んで福山市内に出かけ、帰りは塩を積ん

で帰るといふ仕事をしていたという。

神楽は戦時中に入った途絶え、戦後復活して十余年前までは町内の人が神楽を演じていたが、現在はよそからプロの神楽団を呼んでおり、いわゆる「粟根神楽」は絶えてしまったという。両氏も、原文に紹介されている神楽は見たことがないとのことである。ただ、石工をしていた「渡辺じろう」、「西村のおお」といった人たちが最後の神楽のリーダーで、剣舞や天の岩戸の神楽などを舞っていたという。

原文に紹介されている神楽は不思議なもので、前半は「問尋博士」が現れて濁る川の上に尋ね上る途中、「女人」「大蛇」「山の神」に逢い、そこの教で「五竜の粥」を炊いて、「五人皇子」の戦のさなかに行き、彼らの「血合せして所望の配分をなす」。それですべてが治まって舞いで終わる。後半は「盤古大王」の登場と「四人皇子」の別れ、「五郎皇子山出参殿の詞」、「弓場」に「弓の教授を受ける」、「母宮」の教で「四方殿を巡る」。母の元に帰り「父母の大恩に感服して父の譲りを受け」、「兄四人」と「五河の川上」で「配分につき戦をなす」という内容である。

この神楽の構成は、三村泰臣著『中国地方民間神楽祭祀の研究』⁹⁾において、第二部第五章「備後地方の荒神神楽祭祀」で取り上げられている「五行祭」という神楽の台本と、ほぼ同じである。本書によれば、荒神とは、「祟りやすい荒ぶる性格の神であるとともに、祭祀者を庇護する強い力を持つ神であるとも信じられている」もので、その荒神の性格と名称は「まことに多種多様」、「素戔鳴尊、三宝荒神、土公神、竈神、塞神など」とも考えられ、「それらが複雑に混在し信仰されてい

る」という。中国地方全域において荒神信仰は盛んで、「備中・美作から備後・伯耆一円に」広がっているという。神楽の内容については、同「第八章 荒神神楽祭祀の祭式構造」で詳細に解説されている。託宣行事に先立って必須とされるのが「五行祭」（「五龍王」・「王子舞」ともいう）であるという。

「五行祭」は、二五〇歳の盤古大王（中国の創生神話で最初に誕生する）が妻と四王子に形見の品を授けて別れるところから始まり、その際まだ母の胎内にいた五郎が長じて自らの出生を母に確認し、居場所を兄四王子と戦って獲得するまでの壮大な人間ドラマとなっている。それは、次のようである。

配役

大王・后・太郎・次郎・三郎・四郎・五郎・弓場・問尋博士（問訊・門前・門善・文宣とも）・天女・水神（大蛇）・山神

荒筋

第一場「大王立ち（山立ち・山出で）」、第二場「四王子の山立ち・談合」で天から知恵者が天下つたため、四王子が結集。第三場で「五郎王子の山立ち」、第四場で「弓場に弓術を習う」、「第五場」で、五郎が母に父の名を尋ね、第六場「四方殿を巡る」で、兄四王子の下を訪ねるが、兄に「鬼の風子だ」と言われ、その真偽を母に求める。第七場「父の譲りを受ける」で、母は親の恩愛を説き、父の形見を譲り渡して兄に自らの所務配分を求めるように言う。第八場「恒河こんがの川上の合戦の場」で、四王子は所務の配分を拒み、それぞれ赤帝赤龍王、白帝白龍王、黒帝黒龍王、青帝青龍王となり、五郎王子は黄帝黄龍王となつて戦う。第九場「所務分け」で、恒河の川下に住む門尋博士が川の

五色の濁りを不思議に思い、遡上、途中で天女・大蛇（水神）・山神に会い、四王子と五郎の戦いを知る。山神の教えで「五龍の粥」をたき、五王子が「一腹一生」であることを示す（血合わせ）。四王子は所務配分に応じ、皆が所願成就の舞を舞う。

井伏が取り上げているのは、第九場の「問尋博士」（井伏原文では「問尋博士」）の段と第一場の「盤古大王」の段であり、その順番が前後逆転しているが、内容はここに紹介されている「五行祭」のものとはほぼ同じであるといつてよい。

三村は、備後の「五行祭」について「五行祭は中国漢代に生まれた陰陽五行説に基づいて構成された神楽」であり、「近世に「土公神祭文」として成文化」され、「五龍王」（石見）、「五行」（備中）、「五行祭」（備後）の名称で実演されてきたという。「備後・備中ではこれが非情に鄭重に扱われ内容的にも充実している」という。

陰陽五行説は、「日本に漢字が移入された頃に伝えられ、漢字とともに日本人の精神構造の基礎となった」とし、「七世紀後半から陰陽道に取り入れられ、日本の原始信仰とも密接にむすびつ」とともに、「仏教や神道によつて擁護され日本の民間神楽に多大な影響を及ぼしてきた」と述べている。

三村は、「五行祭」の主題について次のように論じている。「陰陽五行説」は、「宇宙空間における森羅万象を、陰と陽の関係において捉えようとする二元論」であり、「天象」の「太陽（日）と太陰（月）の二元」に対して「人象」の「男女両性」があり、この陰陽の「交感・交合」によつて「万物は生成化育・栄枯盛衰をくりかえす」（吉野裕子『日

本の『古代呪術』より)という「自然哲学」だと説明している。その主題については、兄弟、母子の対立を乗り越えて母が五郎の出生から今までの苦勞を語り、この世に生を享ける喜びを示す「第七場」を重視し、その「中心メッセージ」を、次のようにまとめている。

このように五行祭の中心メッセージは陰陽五行の哲理を語り兄弟の結束を促しながらも、重心は夫婦と親子の情愛に置かれているようである。父母の情愛によって人がこの世にあることの有難さを語り聞かせ、その情愛を弁えて生きること語り聞かせようとする。このように五行祭は自然と人間の本来の姿に開眼させ、情愛による生死の究極的意味を理解させようとする一大叙情と捉えることができる。

しかも、この物語が盤古大王の死から始まることを重く見、託宣行事に先立って行われる「五行祭」を、「生死の苦悩を超越すること」を促す物語だとしている。これを「共生と循環の思想」と名づけている。

つまり、「五行祭」は非常に古くから伝承されてきたもので、自然の変移や人の生死について人々の精神構造に刻み込まれてきたものであることを物語っている。また、「五行祭」には、「歌と語りを中心にした形式」と、「舞(劇)を中心にした形式」とがあり、備後では前者をとり、「土公神祭文を歌い語ることを主とし」、「見る神楽ではなく聞く神楽」で「特殊な神楽」としている。全部の演目を演ずると、八時間にも及ぶという。

井伏は、作中で神楽の演目やせりふを引用するとともに、成文化された「台本」があり、演者である「石工や荷車曳きの男」がこれを「愛

誦」、忠実に再現していることを、驚きをもって描いている。また、その台本の内容について、「陰陽学に立脚して述べた古代史の一部分」とし、また「芸術的には殆ど無性の作者によつて作られたものらしく、用語は譬へば田舎の神官の演説口調である」と述べている。

・それは民家の庭に二間四方の板張りを設け、さういふ簡単な舞台なのである。けれど演技者たちは非常に熱心であつて、彼等の知つてゐるかぎりの芸題を幾つでも上演する。

・石工や荷車曳きの男たちは、これ等の台本をことごとく記憶して、どんな早口に言ふときでもまごつくことがない。

これらの井伏の表現には、村に伝えられてきた文化への新鮮な着目を感じられる。しかし、一方、いつもの韜晦的な表現で、「旧時代調の会話に近代味の乏しい抑揚をつけて、大声で歌ふ」とか、作品末尾では、これらのせりふ抜粋を「つまらなくなつた。」とし、それは陰陽学の「出鱈目の神がみの系統譜にすぎない」と述べ、大衆を絶対化することに距離を置こうとする部分も感じられるのであるが。この神楽は、三村の調査では、備後地方では「江戸時代末」から「盛況を呈したが、昭和三十年代より急速に衰退し危機的状态にある」もので、実際前述のように井伏の在所では絶えてしまったのである。

(5) 「ウシトラ様」⑤ 「王子舞」実見 二〇二二年十月二十日、

浦崎上組集会所にて「盤古大王」を見る

筆者は、「王子舞」が、福山大学の立地する松永湾に隣接する地域で今も演じられていることを、栗村真理子氏より伝え聞いた。三村氏もこの神楽を調査済みという。二〇二二年十月二十日、尾道市浦崎町浦

崎上組神楽同好会により、上組集会所(大神宮)で奉納神楽が上演された。午後六時半から翌二十一日午前一時半まで延々演じられ、その最後の九番目の演目が「盤古大王」で、二十二時半から三時間半にわたって「王子舞」が演じられた。

舞台は、井伏の作品にあるように、集会所前の広場に設定された二間四方の板張りの仮説舞台である。二箇所には薪を盛大にたき、板張りの一面に楽屋が続き、観客は三方から見る。集会所の扉を開け放つてそこから見る人、広場に敷物を敷いてみる人、立ち見の人がこれを取り巻く。集会所の台所では、婦人会のリーダーたちがお茶や食べ物の接待をする。第八番「八俣大蛇」では、「おろち」が三匹舞台狭しと暴れ回る。舞台脇には小さな子供たちが十人ばかり頭を並べてかぶりつきで「おろち」の動きに見入る。時には「おろち」は、舞台からはみ出して子供たちの方にせり出す。その華やかな「八俣大蛇」が終わって「とり」が「盤古大王」である。「盤古大王」では、面を使用しない。「五郎」は「シヤグマ」という馬の毛で出来た長い髪の毛のようなかつらをかぶる。后も面を使用しない。囃子は太鼓のみで、特殊なリズムを打ち鳴らす。「大王の山出」があり、四王子への譲りがあり、后との別れがあり、いよいよ「五郎王子の山出」が始まる。「五郎」は、この神楽の主役で、今回は、「前王子」「後王子」と、二人の役者が前半・後半を演じ分ける。前半は今回舞い手に抜擢された福山大学四年生の藤井翔太君である。後半は中堅の役者で、四十代の消防署員が演じる。長い難しいせりふと剣舞、舞を覚えなければならぬ大役である。

この演目の見所は、後半、五郎が兄四王子のところを回って自らの

配分について願ひ出る「合戦」という章段である。ここでは、五郎が兄一人一人と対面して対決する。ここでは、アドリブで五郎が兄一人一人と相撲をとり、五郎が場外に投げ出されたりする。ここでは、待ったとばかりに客席から「行け!」「やれ!」と声がかかり、それまでの静かな雰囲気から一転、舞台客席は一体となって熱狂する。そのうち、観客の中から中学生か高校生か(この若者たちは舞台の黒子らしく、舞台の袖に待機しているらしい)の一人が舞台上がって「五郎」に加勢し兄役と取っ組み合いをする。また、次の場面では、楽屋の方に押し出された「後五郎」がいつの間にか「前五郎」と入れ替わり、「前五郎」が舞台に出て兄役を引き倒す。一対四の多勢に無勢であるから、客席は「五郎」に味方するのである。その中で、十代、二十代の若輩とおそらく部落の顔役である兄役たちとの世代抗争らしきものが重ねられるのも興味深い。客席は、このアドリブに大声で笑い合い、湧き上がるのである。

このような盛り上がり間を挟んで、母から五郎への盤古大王の譲り渡しがあり、最後兄弟が「一腹一生」であることが明かされ、「所望配分」でそれぞれの配分が定まってみんながいっしょに舞い納める。「門尋博士の場」はこの度の神楽の台本にはなかった。

ちなみに、さきほど五郎に加勢したらしい中学生、高校生たちが、神楽が終わると、舞台衣装などの片付けを黙々と手伝っていたのが印象的であった。彼らは神楽同好会の跡継ぎで、この活動を通して行儀見習いもすることである。これらの長い物語を見ている観客はほぼ内容が分かっており、見せ場も心得てその場面が来るのを楽しみに、

お茶を飲んだり、話をしたりして待っているという感じであった。ここには、神楽イベントを通しての部落全体の生き生きとした世代交流があり、井伏の見たその昔の雰囲気が彷彿とした。

作中で井伏は、これらが演じられる場面を次のように描いている。

石工や荷車曳きの男たちは、これ等の台本をことごとく記憶して、どんな早口に言ふときでもまごつくことがない。しかし熱狂して来ると、主役以外の人物は自由に演技することが黙容されてゐる。

舞台の草刈り娘を噛み殺してはいけない大蛇が、その草刈り娘を噛み殺し、舞台の近くで見物してゐる少年たちの腕にまで噛みつくことがある。さういふときには焚火は盛大に燃えあがり、はやし太鼓の音はすさまじく打ち鳴らされ、大蛇は鎌首をあげてあばれまはる。それに扮装した人物が疲れてしまつてからでなくては、演技は台本通りに進行しない。

まさしく、筆者が見た神楽の舞台と同様のアドリブが演じられ、熱した雰囲気が祭りの場全体に広がる様子を如実に感じることができる。この雰囲気は、井伏の末尾の文章にあるとおり、せりふの抜粋だけでは伝わらないのだとはじめて実感したのであった。井伏も「かういふ会話篇は都会の文学雑誌に掲載すべきものではなくて、辺鄙な田舎に於ける民家の庭に立つて」、「村会議員や石工の子弟たちと一しよに、その演技を見物すべきものである」と述べていた。

(6) 「ウシトラ様」⑥教養としての神楽

「ウシトラ様」に描かれた「在所」の人々の世界観は長い歴史の中
で伝承されてきたもので、奥深い。そこには一つの哲学があるとも

にそれに基づいて構築された生活信条があり、また、それらは演じられる神楽として生き生きと語り伝えられてきたのだといえる。それは、明らかに一つの教養だと言つて良からう。「文化的におくれた層」といつた紋切り型の大衆像からのずれが実感される。井伏がプロレタリア文学運動における「大衆像」の貧弱さに対して反旗を翻し、確かな民衆像の一端とともに「文学」の原点を提示しようとしていることは明らかであろう。

4、「田園記」その2「竜王様」

「竜王様」は、福山地方では「リオウサン」と発音し、至るところに祀られている水の神である。これも井伏生家のすぐ裏山の「大仙山」と呼ばれる山の山頂にある。筆者は、二〇一二年二月二十四日に、山根氏の案内でゼミ生三人とこの山に登つて、祠を実見した(写真参照)。作中には、「ウシトラ様の祠よりも更らに貧弱」で、「金網のとれたカナリヤの籠」のように見えるとあり、確かに小ぶりの祠であるが、その祠の前には拝殿のような瓦葺の建物が建っており、いずれも新しく整備された趣がある。七年ごとの式年には人々が寄付を募つて祭りをしていることが実感される。戦後すぐのころ雨が降らなかつたことがあり、明日は雨乞いをするということで、薪を集め準備をしていたが、翌日降つたため雨乞いは行わなかつたという。それ以後、雨乞いは行つていないという。

ただ、この祠の傍に「雨ざらしになつてゐる」という「三尺の高さ」

の「竜王様の尊像」は、今は見あたらず、祠の傍の地面には常滑のよな水がめが埋め込まれているのみである。昔あったというその「尊像」は、原文では極めて印象的に描かれている。

この神様は水のことに關する一さいの神秘を取扱ふ神様であるとされてゐて、尊像は荒刻りの大蛇の石像である。とぐるを巻きとされてゐて、大きな口をあけて、何時でも彼の意志のまゝに黒雲をよび寄せる意気込みを示してゐるのである。彼の胴体には一面に白い色の扁平な苔が密生して、彼は白色の鱗を持った大蛇に見える。

その姿は力強く、神秘的である。だが、この像は、「一昨年の夏」の「大早魃」の際、雨乞いしたにも関わらず雨が降らず、「反発心の強かつた壮丁たち」に「折檻」され、「藤つるで縛り、峯から引きずりおろして、淵に突き落と」された。しかしやはり雨は降らず、再び引き上げて罪を許してくださいと祈つたという逸話が紹介されている。「竜王様」は農村にとって生き死にに關わる一番身近な神であり、それだけに切迫した関わりがあつたことが想像される。

大蛇の鱗は川に落とした際水に流され、それ以後神像は盡力を失い、「雨雲を呼び寄せるほどの神秘性を失つてしまつた」とある。末尾の一文には、竜王様の祭日に焚かれる焚き火の煙に乗つて「天に昇る」大蛇が幻想されている。今は祠の中には、ご神体として石が納められている。これは、藤壺のような白い物が付着した手のひら大の緑色の石である。これが尊像のかけらであるかどうかは判明しない。山根氏もこの尊像については知らないとのことである。大谷池ができてから

は、水の心配はかなり解消されたと聞く。今では「竜王様」信仰は、重要性を失つていようだ。

5、「田園記」の主題

「田園記」に描かれた二つの祠は、井伏の在所の二大信仰を指し、「ウシトラ様」＝地の神、「竜王様」＝天の神であり、二神合わせてこの世界全体を現すと言つてよからう。しかも、そこにはいずれも「大蛇」＝「龍」の神秘が描かれるという共通点がある。

「ウシトラ様」でも、井伏は「問尋博士」と「大蛇」が登場する後段を優先的に引用するとともに、三村とは異なり、博士と大蛇の間答の部分を作中に引用して、「龍」を重視している。そこで大蛇の描写や、川の中での兄弟の合戦の場は、水中の一大スペクタクルである。

博士「……一丁二丁と川上を清めのぼりてみるなれば、この川端に身の丈十六丈ものびあがり眼を見ひらけば朝日のごとく、角は春日に枯木を干したるごとく、赤き舌を振ること火を吐くやうに見えける恐ろしき大蛇にて候。汝は何故にこの川を濁したまふぞ。早く澄まして天上なしたまへ。」

大蛇「僕は青竜川・赤竜川・黄竜川・白竜川・黒竜川、五つの川が落ち合ふて五河の川と申すなるこの大なる川に水神なくては叶ふまじ。僕はこの川、八水神五王の主にて候。〔中略〕尋ねのぼりみたまへやのう。」

ここには、「大蛇」＝「龍」の神秘への畏怖が感じられ、人々の信仰の

源を見ることが出来る。これは、昭和八年のエッセイ「架空動物譜」にも言える。この作品には、人魚、河童など、水生の「架空動物」が取り上げられているが、その代表が「竜」であり、文章の末尾には、東洋・西洋の竜について「ドラゴンも竜も同様に口から火焰を吹き自由に天空を飛翔し、深淵に潜む能力を持つてゐる。彼等は雲や雨や吉凶に関することを掌る権威者である。いづれも爬虫類に属し、いづれも雄渾な感じの形態をそなへてゐるが、格闘すれば東洋の竜が勝つだらうと私は考へる。どことなく私にはさう思はれる。」と描かれ、「竜」への井伏の思いは強い。それを通して、あたかも人々の生きる力の強さを浮かび上がらせているように思われる。プロレタリア運動の終焉に当たって、井伏が想起したのは、人々の心に眠る不死の生き物、精神的なエネルギーの存在ではなかったか。

6、まとめ

以上のように、昭和六年から八年にかけての「在所」にまつわるエッセイを見ると、そこに「在所」の人々の世界観、生活信条を知ることのできる材料への着目が見て取れよう。これらのスケッチを吟味すると、生き生きとした人々の生活心情が浮かび上がり、プロレタリア文学における「文化的におくれた」大衆という見方に対して疑義を申し立てようとする意図が透かし見られる。そこには、井伏が構築した「生きた民俗学」とでも言うべき独自の「大衆文学」の姿が浮かび上がるといってよいのではなからうか。

注

- (1) 青木(秋枝)美保「井伏鱒二の小説『鐘供養の日』―高田さん』のモデルと梵鐘供出の事実を追って―」(『井伏鱒二の小説『鐘供養の日』研究の歴史』 福山大学近現代文学研究室 二〇〇九年十月)
 - 1 戦時下小説としての位置づけ 及び 梵鐘供出の事実と高田鑄造所の歴史
 - (2) 秋枝(青木)美保「井伏鱒二 プロレタリア文学への対応―いわゆる「芸術大衆化論争」と「在所もの」」(『福山大学人間文化学部紀要』 第十二巻 二〇一二年三月)
 - 秋枝(青木)美保「井伏鱒二の幕末もの」(『戦時下小説『鐘供養の日』を基点として』(『井伏鱒二の(まげもの) I―龍馬の時代と井伏鱒二の歴史小説―』ふくやま文学館 二〇一〇年九月)
 - (3) 松本鶴雄『井伏鱒二論集成』(沖積舎 二〇〇四年二月)
 - (4) 前田貞昭「井伏鱒二における文学的自己定位―文学青年・「私」・プロレタリア文学―」(『近代文学試論』三十号 一九九二年十二月)
 - (5) 川崎和啓「朽助のゐる谷間」(『国文学 解釈と鑑賞』五十九巻六号 一九九四年六月)
 - (6) 『日本民俗大事典 上』(福田アジオ他編 吉川弘文館 一九九九年十月)
 - (7) 土井卓治「道祖神と性神」(『講座 日本の民俗宗教③ 神観念と民俗』弘文堂 一九七九年九月)
 - (8) 『日本民俗語大辞典』(石上堅著 桜楓社 一九八三年四月)
 - (9) 三村泰臣「中国地方民間神楽祭祀の研究」(岩田書院 二〇一〇年十月)
- なお、井伏鱒二の作品の引用は、『井伏鱒二全集』一巻・二巻・四巻(筑摩書房 一九九六年十一月・一九九七年二月・一九九六年十二月)による。

(あきえだ みほ、福山大学教授)



ウシトラ様の祠(内景)



ウシトラ様の祠(外景)



竜王様の祠内部(御神体の石)



竜王様の祠(外景)



尾道市浦崎上組奉納神楽 「八俣大蛇」
浦崎上組集会所にて 2012・10・20



同 左 「盤古大王」 五郎の舞